

東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会

第8回街づくり・持続可能性委員会

日時：平成30年3月29日（木）16時01分～17時36分

場所：虎ノ門ヒルズ森タワー 9階 TOKYO

○武藤事務総長 定刻となりましたので、ただいまから、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会第8回の街づくり・持続可能性委員会を開催いたします。

冒頭の進行を務めさせていただきます、組織委員会事務総長の武藤敏郎でございます。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

また、前回と同様になりますが、本委員会はメディアの皆様にも公開とさせていただきます。カメラ・スチール撮影の皆様は、冒頭撮影のみとさせていただきますが、記者の皆様は引き続き傍聴可能とさせていただきます。よろしくお願いいたします。

なお、本日の委員会はペーパーレスにて行いますので、御不便をおかけすることもあるかもしれませんが、よろしくお願ひをいたします。

それでは、会議開催に当たりまして、本委員会の委員長であります、株式会社三菱総合研究所理事長並びに元東京大学総長の小宮山宏委員長から一言御挨拶をお願いいたします。

○小宮山委員長 小宮山でございます。非常に早いもので、平昌のオリパラが終わって、東京大会まであと850日を切ったところです。

今日は二つ、後から申し上げるように、大きな議題があるのですけれども、1年半前から比べますと、まとまりが出てきて、お陰様で随分よくなってきているように思っておりますが、ますます磨きをかける必要がございますので、皆さんのこの後の議論を期待しておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

○武藤事務総長 ありがとうございます。

それでは、次に、当委員会の委員の変更につきましてお知らせをいたします。

持続可能性ディスカッショングループの座長でもありました、高巖様が御退任され、新たに明治大学経営学部特任准教授並びに損保ジャパン日本興亜株式会社CSR室シニアアドバイザーの関正雄様に加わっていただいております。

それから、持続可能性ディスカッショングループの座長は、崎田裕子委員にお願いしております。

それでは、関委員、崎田委員から一言ずつお願いを申し上げます。

○関委員 御紹介いただきました、関でございます。

もともと損保ジャパン日本興亜で環境とCSRの推進をずっとやってきておりまして、5年ほど前から明治大学でも教えているということでございます。

この委員会では、ディスカッショングループ及び調達ワーキンググループ、人権労働ワーキンググループの委員も務めさせていただいております。どうぞよろしく願いいたします。

○崎田委員 持続可能性ディスカッショングループは当初、高先生が座長で、私が、副座長ということで高先生をフォローさせていただこうと思っておりましたが、おかわりになるということで、そのまま座長をやらせていただいておりますけれども、非常に委員の皆さんが積極的に御発言いただいているので、それをまとめるのだけでも大変な状況ではございますが、本当に和気あいあいとやらせていただいております。御協力ありがたいと思っております。今後とも、よろしく願いいたします。

○武藤事務総長 関委員、崎田委員、今後ともどうぞよろしくお願いを申し上げます。

また、本日は臨時委員として、政府より、内閣官房、多田健一郎企画推進統括官、東京都より、臨時委員の代理として、オリンピック・パラリンピック準備局、砂田覚施設担当部長に御出席をいただいております。

オブザーバーとして、外務省より、原琴乃地球規模課題総括課長補佐、途中からの御参加となりますけれども、国連広報センターより根本かおる所長に出席いただくこととなっております。

また、人権労働・参加協働ワーキンググループから黒田かをり座長に出席をいただいております。

よろしく願いします。

次に、当組織委員会における組織変更及び担当の変更についてお知らせをいたします。

まず、街づくり・持続可能性委員会の担当副事務総長は、今まで佐藤副事務総長でしたが、山本副事務総長にかわっております。

それから、これまで持続可能性部は、大会準備運営第一局に属しておりましたが、組織変更により、昨年12月から総務局に変わりました。これに伴い、担当局長が井上局長から手島局長にかわっております。

また、持続可能性部の田中部長が今年1月に出向元に戻られ、後任として荒田部長が就

任しております。

最後に、アクション&レガシー部の佐々木担当部長も9月に出向元に戻られ、後任として伊藤担当部長が就任しております。

以上、御報告いたします。

ここから先の議事の進行は、小宮山委員長にお願いいたします。

○小宮山委員長 それでは、議事に進みます。

本日は大きく二つ議題がございまして、第一に、東京2020大会の準備状況等の御報告、及びSDGsに関するアクションについて、それから次に、持続可能性に配慮した運営計画（第二版）の策定に係る進捗状況についてでございます。

まず、第一の議題について、事務局から御説明をお願いします。

○中村企画財務局長 ありがとうございます。まず、2020年大会に向けた準備状況について、御説明をいたします。

お手元にRoad to Tokyo 2020というA3の紙があるかと思いますが、こちらはいろんなところで広報の発表をしたり、PRに努めたりしておりますが、それがパーツ、パーツのため、全体像はどうなっているのか、2020年に向けて、何が、いつ行われるのかということがよくわからないという声を聞きますし、それが、ややもすると遅れているんじゃないかといった御心配にもつながっているところもありまして、準備自体はIOC、IPCからも非常に順調に進んでいるというように言われておりますけれども、きちんと皆様に御理解をいただく一端として、一覧表をつくったものでございます。

分野ごとに時系列に整理しておりますけれども、例えば上のほうで申し上げますと、イベントの競技日程の関係では、今年いっぱいにはイベントスケジュールの競技日程を決定いたします。そうなりますと、野球やボッチャやいろんな種目の日にちが、いつから予選が始まり、いつが決勝なのか、何時からなのかといったところが決まってまいります。

また、聖火リレー、開閉会式につきましても、この春には全体像のようなものがオープンにできないかと今、調整を進めているところでございます。また、開閉会式も年末に基本コンセプトを策定いたしまして、8人の基本コアメンバーを今、選んでおりまして、その8人のもとで4大会共通の何を東京大会として開閉会式で訴えていくのかといったところのポイントを整理していただいているところでございます。

ボランティアでございます。これは、今年の非常に大きなトピックの一つでございまして、今週の理事会でも概要を報告し公表させていただきましたが、今年の夏ぐらいに募集

要項を皆様にオープンにいたしまして、来年から面接などのプロセスに入っていくということをご予定しております。

そのほか、輸送や飲食、警備といったところにつきましても、東京都や国と詳細な計画を具体化していくというところがございます。

持続可能性について、本日、御議論いただきますけれども、近々、バージョン2を決定したいと、本日はそれに向けた御審議をお願いしたいというふうに思っております。

インフラ整備でございますけれども、選手村はもう既に工事が進んでおりますけれども、組織委員会としましては、競技会場の仮設オーバーレイと申しまして、オリンピック仕様にするために、観客席であるとか競技用のプレハブテントといったプラスアルファでつくることの発注をこの4月から始めたいと思っております。四十数会場ございますけれども、それがこの4月から本格化するわけがございます。

そのほか、機運醸成の関係でございますけれども、参画プログラム、これは後ほど御説明をしたいと思います。

そのほか、マスコットのデザインがこの2月の末に決まりまして、全国の小学校の約8割に参加していただきました。全国の小学校が一つのものを決めるということ自体、非常に小学生にとってはまれなことだと思いますけれども、それが2020年、その後も記憶に残るマスコットということで、非常にエポックメイキングなことであったかというふうに考えております。

また、今年の一つの大きなトピックといたしましては、チケットでございます。こちら先ほど競技日程が今年中に決まるということをご申し上げましたけれども、それと相前後いたしまして販売に向けた準備を開始いたします。一般の販売は、恐らく年明けになるかと思っておりますけれども、今年いっぱい、その準備にいそしむということでございます。

以上が、全体像と今年どのようなことが大会準備で行われるかといった御説明でございました。

続きまして、資料の2でございますが、画面を御覧いただきたいと思いますけれども、参画プログラムの現状でございます。一昨年の秋にスタートいたしまして1年半がたちました。この委員会でもさまざま、もう少しわかりやすくしたほうがいいのではないかとか、簡単な手続にしたほうがいいのではないかといった御意見をいただきまして、いろいろシステムをわかりやすくしたり、統一のウェブサイトをつくったり、ウェブサイトで登録できるような工夫をいたしました。

その結果、年度末時点で、4万件のアクションでございます。また、参加人数、これはイベントごとに登録をしていただくものを足し上げたものでございますけれども、3,350万人ということで、大きなイベントから小さなイベントと、様々ありますが、かなり積み上げとしては広まってきたのかなと思っております。

また、全国も、一時は関東中心であり広がりを持たなかったんですけれども、まだばらつきはございますが、かなり全国に広がったと思います。これが後ほど御説明するマスコットで、全国8割の小学校が参加していただいたということで、さらに機運が盛り上がってくるのではないかと考えております。

幾つか個別のアクションを御説明したいと思います。「バリアフリーフェスタかながわ2017」ということで、2017年の10月でございますけれども、街づくりの関係で、慶應義塾大学の日吉キャンパスで行われたものでございます。バリアフリーの街づくりに対する理解が、醸成されたという報告を受けております。

また、これも17年8月でございますけれども、これは仙台市でございます、ダイバーシティの観点から、障がい者の方々にも参画いただきまして、どうやってそういった方々といろんな経験を共有して、社会をつくっていくかといったところをイベントとして楽しみながらつくっていったというものでございます。

こちらが、この委員会でも主動をしていただきました使い終わった携帯電話や小型家電を抛出いただきまして、そこから都市鉱山、金、銀、銅を抽出いたしまして、メダルをつくっていきましょうということでございます。こちらも、既に240万台の携帯電話がNTTを通じて集まってきております。また、自治体のほうでも、小型家電、6,000トン余り集まってきております。

種別で申しますと、金と銅はかなり順調に集まってきておりますけれども、銀はもう少し頑張らなければいけないということで、これは主にパソコンに入っているということでございますので、今後はNTTに加えまして、家電量販店などにも御協力をいただいて、中古のパソコンを抛出いただきたいということを考えております。

これも100万単位で御参加いただきますし、まさに大会の一部に御参画いただいたという具体的なプロジェクトとして、これからも進めていきたいと考えております。

続きまして、食品ロスの削減全国大会でございます。こちらは長野県の松本市で開催されまして、自治体や消費者の方々、食品関連事業者に集まっていただきまして、食品ロスをどうやったらなくせるかといったところでございます。

これは、2020年の大会でも一つ大きなテーマで、今、いろいろ担当局で検討を進めておりますけれども、ムーブメントとしてもこういったイベントを行ったということでございます。

次が、木材活用でございます。こちら選手村の選手が集う空間、ビレッジプラザというところがございますけれども、ここを単につくるだけではちょっと芸がないと、何か一工夫できないかということで全国の自治体に呼びかけまして、そこからもし可能であれば木材をちょっと拝借できないかと。ここで2020年の夏の間、選手が集うビレッジプラザにその木材を使いまして、それが終わった後、またその木材をお返しして、その地元で、公園のベンチであるとか、老人ホーム、小学校、保育園といったところに活用いただけないかというものです。

それが2020年のレガシーとして各地で根づく、あるいは持続可能性、再利用の観点からも非常にプラス面が多いプロジェクトだということで始めましたけれども、ここにありますとおり63の自治体に御応募いただきまして、御協力を得るということで順調に進んでいるところでございます。

続きまして、これは何度か申し上げましたが、マスコットでございます。小学生が決めたということで、全国で8割、東京では約95%、例えば富山県などはほぼ100%ということで、東京以外の各地域で根づいたということと、あとは次世代を担う子どもたちに関与していただいたということで、これはIOC、IPCからも非常に高く評価された取組でございました。

さらに、決めていただいたマスコットを有効に活用して、機運醸成に向けて取り組んでまいりたいというように考えております。

続きまして、レガシー・レポーティング・フレームワークということでございます。これは、IOCも我々と一緒にレガシーについて、どう整理していくかというところをずっと議論してまいりましたけれども、我々はアクション&レガシープランということで問題提起をし、彼らも、IPCもレガシーについて、ショートタイムではなく、もう少し中期的に骨太のレポートをきちんとつくっていかうということで、これを東京大会からスタートしたいということで、先般、IOCから公表されたものでございます。

こちらは、東京都やほかのシンクタンクや学術機関と一緒に取り組んでいきたいというように考えております。

以上が参画プログラムでございまして、その一環でございますけれども、最初に申し上

げたとおり、参画プログラム自体は、3,000万人を超える方々に参画いただいております、あと2年余りですが、広がり是一定程度、確保できるかと思っております、やはりアクションということで、例えばメダルプロジェクトや、マスコット等、これまでもエポックメイキングになるようなものがありましたけれども、さらにこの2年半、環境の分野でもう一頑張りできないかということで、考えているものを御紹介させていただきたいと思っております。

それは、SDGsに関することをごさいます、今日、来ていただいております国連広報センターや、外務省ともいろいろディスカッションをしております、まさにこれから一緒に取り組んでいきたいと思っております。

御案内のとおり、SDGsというのは、非常に今、広がりを持っている活動でございますが、一方で、まだまだS・D・Gと、これは何を表すのかとか、何か聞いたことはあるけど、具体的なイメージが湧かないというような声も聞こえるところでございます。

ぜひ、2020年のオリンピック・パラリンピック大会、これはかなり国民の方にも周知が行き届いているので、その大会とうまくSDGsを結びつけて、よりこれを一つのきっかけとして、さらに持続可能性の動きが広がってくれば、これはお互いウィン・ウィンになるのではないかとということで、やっていきたいと思っております。

やはり、大事なのは抽象的な話ではなくて、具体的にどうしたらいいかということで、ぜひ今日、皆様にもいろいろお知恵を拝借したいと思っておりますけれども、例えばでございますが、次のスライドでございます。

大きく分けて、国民がSDGsを知っていただく取組として何ができるかということでございますが、これはまだまだアイデア段階でございますけれども、17個のロゴを、例えば組織委員会の出版物であるとか、あるいはボランティアのユニフォーム等につけることで、あのロゴは何なのということで、関心を引き、話の種になるのではないかとと思っておりますし、17の開発目標について、2020年大会やオリンピック・パラリンピックがどのように結びつくのかといったところを具体的なストーリーとともにパンフレットなどにして、あるいは、マスコミの方にも報じていただくということで、国民の方々に知っていただくということがあるかと思っております。

もう一つは、知っていただくだけではなく、何か具体的なアクションとして結びつきができないかということで、環境に関心のある方々から具体的なアイデアを募集しまして、具体的に大会運営で実現していく、あるいはスポーツの大会ですので開発途上国にスポー

ツ用品の御寄附をいただきまして、途上国にお配りをする、あるいは「打ち水」というような、既にやっているようなものをより広がりを持たせる等、これらはまだ思いつきでございませけれども、本日お集まりの委員の方々からもサジェスションやアドバイスをいただければと考えております。

私からは以上でございます。

○小宮山委員長 ありがとうございます。

それでは、内閣官房の多田さん、東京都の砂田さんから、国や東京都における街づくりや持続可能性の取組について、それから、外務省の原さん、国連広報センターの根本さんから、SDGsに関するアクションについて、一言お願いします。それでは、多田さんからお願いします。

○多田委員 内閣官房でございます。

持続可能性に関して、政府から2点、御紹介したいと思います。

1点目が、先ほどビレッジプラザの木材利用にも話が出ましたが、政府でも木材利用を積極的に進めていこうということで関係者、定期的に会議を開催いたしまして促進しておりますが、一例で言いますと、新国立競技場でございます。今、整備しているところでございますけども、約2,000立米の木材を利用するということでございまして、28年度に国が公共施設で使った木材使用量の半分以上を超えるボリューム感でございます。

具体的には、軒びさしということで、ひさしを三層つくります。ここに47全ての都道府県から調達をした木材を活用しますとともに、エントランスゲートが三つございませけれども、こちらには被災県、東日本の3県と、それからもう一つは熊本の木材を活用していこうということで取り組んでございます。

そういったことで、それ以外につきまして今後も木材利用、建築物以外のことも含めて、活用していこうということでございます。

それからもう1点は、組織委員会で策定されております、調達コードに関連しまして、労働安全ということの観点もございませ。そういった意味で、大会に関連する施設の整備について、厚生労働大臣政務官を座長とします協議会を設置しまして、調達コードの理解促進、再発防止といったような取り組みを今、進めてございます。

簡単でございますけど、私から、以上でございます。

○小宮山委員長 ありがとうございます。

砂田さん、お願いします。



○砂田委員（代理） 街づくりの観点から、現状を御報告させていただきたいと思います。

私どもは、競技会場の整備をメインでやってございまして、臨海部におけます7会場、お陰様で順調に工事は進んでございまして、マスコミから取り上げられることも若干多くなってきました、大会の盛り上げに貢献できればなと思います。

街づくりの観点からは、カヌー・スラローム会場は、葛西沖の土地区画整理事業の中で若干、未利用な状況がありましたけれども、それをきちんと都民の皆様方に使っていただけるようになればと思います。

また、海の森水上競技場につきましては、クロスカントリーのコースと合わせまして、臨海部に150ヘクタールという新たな公の場ができるというのが街づくりの観点からはポイントかなというように思っております。

7会場合わせまして、訪れる方は300万人を超えるということ、目標でやってございしますので、前回大会での評価と同様なものがいただけるよう、持続可能性に配慮して施設整備に全力で進めてまいりたいと思いますので、引き続き応援よろしく願いいたします。

以上です。

○小宮山委員長 ありがとうございます。

それでは、原さん、お願いします。

○原外務省課長補佐 ありがとうございます。今、政府でもSDGsについて、取り組んでいるところでございますが、昨年末に2020年のオリンピック・パラリンピック大会も視野に日本のSDGsモデルを構築して、積極的に発信するということを決定いたしました。その三本柱として、ビジネス、地方創生、そして次世代・女性のエンパワーメントを掲げました。

これらは、全てオリンピック・パラリンピックに直結していると思っております。多くの企業、さまざまな都市やホストタウンが参加され、そして女性と次世代が夢を持ち活躍するという観点から、皆さまが今日御議論いただくアクションも含めて、日本SDGsモデルのある意味、結晶になり得るというふうに考えており、弊省も含め、政府全体でしっかりと連携していきたいというふうに思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

○小宮山委員長 大変ありがとうございます。

根本さん、お願いします。

○根本国連広報センター所長 国連広報センターの根本です。

いまだ耳なれない言葉であるSDGsの認知を広げる一つの起爆剤として、東京2020に関わっていただけるということ、国連としても大変心強く思っております。

ぜひ認知のすぐ先にアクションも念頭に置いて、アクションの伴うムーブメントにしていただき、その際に、ぜひ制度的なシステミックなアプローチというものをしていただきたい。かつ既に先行して実施していらっしゃる障がい者を巻き込んでの取組、それから食品ロス、削減、木材、都市鉱山、これらの課題は全てSDGsに関わるものですので、先行する大規模な取組もここに取り込んでいただきたいと思います。

そして、街づくりの中でユニバーサルデザインに寄与している取組がいろいろあると思いますが、そういったものにもSDGsのロゴなどを掲出して認知を広げる、そういったシステミックなアプローチをしていただければなというように思います。ありがとうございます。

○小宮山委員長 ありがとうございます。

それでは、委員の方からコメントをいただければと思います。特に、SDGsに関して、ほかでも結構です。1分を目処に御発言いただければと思います。

それでは、細田さんからお願いします。

○細田委員 所用がございまして、出なければならぬので、一言だけ。

今、プレゼンテーションされたことは、大変素晴らしいことで、あとはどのように実行するかということだと思います。最後に国連の方もおっしゃったように、本当に今、インクルージョン、ダイバーシティといった話は、いろいろ重要だと思います。

特に申し上げたいのは、調達で森林認証等々のことで、NPOの方々から、御批判を受けているということで、これは真摯に受けなければいけないと思います。組織委員会だけでできるということは限られていますので、事業者の方や、NPOの方々等、いろんな情報を持っているので、組織委員会はそういう方々をいかに有効につなぎ合わせてネットワークをつくり、まさにインクルージョンで新しいオリンピックをつかって、それをレガシーとして残していく。

特に森林認証、これからでも修正可能でございますので、特にゼロ・デフォレステーション。地元の住民の方々に絶対迷惑をかけるようなことのない森林調達をするということ。これはNPOの方々、本当にいろんな蓄積がありますので、ぜひその方々の知識を利用して、進めていただきたいと思います。

○小宮山委員長 ありがとうございます。

それでは森口さん、お願いします。

○森口委員 森口でございます。

図らずもと申しますか、内閣官房から新国立競技場の話、それから調達コードのお話がありました。今、細田委員から、御指摘のあった点と関係するわけですが、もちろん、今日も御紹介があったように、木材に関して目に見えるところで、そういうものをつくっていくことは非常に重要なわけですが、目に見えない、建設段階で使うコンクリート型枠とか、こういう問題にまで、やはりしっかり注意を払っていくということが非常に重要であります。

アスリートの方々がオリンピックで活躍されるのは、やはり日々の裏にある御努力の積み重ねで、あのような表立った場の華やかなところで活躍されるわけで、我々がやっていることも多分、同じだと思います。表に見えるところだけではなく、日々の裏のところで地道にやっていくところが非常に重要だと思いますので、今、細田委員がおっしゃったことの繰り返しになりますけれども、特に木材等の調達コードの問題、かなり今、話題になっておりますので、これはやはり、ぜひ真摯に受け止めていただいて、十分な対応をお願いしたいと思います。

○小宮山委員長 ありがとうございます。

それでは、枝廣さん、お願いします。

○枝廣委員 ありがとうございます。私もお二人と重ねて、調達コードのところで、やはり禍根を残さないようにしないと、後々まで汚点になってしまうおそれがあると思います。木材がその一つですし、畜産物もバッテリーケースのように、EUでは禁止されているものが日本で提供される可能性があるということを心配しています。

あと、SDGsについてですが、組織委員会、もしくはオリパラのスタンスを少しお聞きしたいと思っています。オリパラ、東京五輪は非常に訴求力があるので、それに乗せてSDGsを広報しようということなのか、それとも東京五輪をSDGs五輪にしようということなのか。今これだと広報プラスつまみ食いの何かできそうなところをやるというように見えるのですが、そのようなレベルで議論するのか、それとも東京五輪は本当にSDGsに照らし合わせてつくっていかようとしているのかということについてお聞きできればと思います

○小宮山委員長 ありがとうございます。

それでは、小西さん、お願いします。

○小西委員 ありがとうございます。ほとんど同じですが、やはり持続可能性を担保するための調達コード、今、調達ワーキングでつくっていますが、今枝廣委員がおっしゃったように、EUに劣ってしまったり、あるいは日本の中でも例えばパーム等の場合は、今、経

産省でつくられているパーム油のバイオマスの持続可能性の行動にもオリンピックのほう  
が、より後退しているような形になってしまいます。この東京オリンピックが一番、少な  
くとも世界でとはいえなくても、国内では最高の持続可能性を担保できる調達コードにな  
ってほしいと思っておりますので、ぜひ、もし何か問題があれば、遡及的にもう一度、コ  
ードを見直すといったこともしっかり考えていただきたいなと思っております。

○小宮山委員長 ありがとうございます。

それでは、崎田さん、お願いします。

○崎田委員 ありがとうございます。私は、持続可能性ディスカッショングループでの議  
論の様子を少しお話させていただきたいのですが、やはり、委員の皆さんにとって、本当  
にSDGsの視点を踏まえてオリンピック・パラリンピックの持続可能性に配慮して実施し、  
それを世界にきちんと発表していくということに関して大変皆さんの関心が高いというよ  
うに感じており、このところ意見もたくさん出てまいります。

そういう意味で今日は、そのSDGsをかなりしっかりと取り組みたいと組織委員会からお  
話があり、大変うれしく思っています。

なお、持続可能性の分野でも、脱炭素、資源管理、大気・水・緑・生物多様性、こうい  
う辺りは、かなり皆さんいろいろイメージは湧くと思えますけれども、今回、人権・労働、  
公平な事業慣行、この辺も非常に今、世界的にも関心が高まっていますので、このような  
持続可能な社会に向けた全体の温度感が高まっていくことが、これからの日本のレガシー  
として、大変重要ではないかというように感じています。よろしく願いいたします。

○小宮山委員長 ありがとうございます。

それでは、マリ委員、お願いします。

○マリ・クリスティーヌ委員 先ほどの皆様方と同じですけれども、持続可能な開発、発  
展といいますか、SDGsは17項目あり、その17項目ももう既に国連トークの中でスポーツと  
SDGsという分野がありまして、その中を見ますと、どのようにこのSDGsとスポーツをつな  
げることが重要かということが書いております。

その中で、例えば貧困をなくしましょうと、スポーツによって貧困な人々が自分たちも、  
豊かな生活ができるようになるという、そのようなつながりを見るために、私たちにもそ  
ういうSDGsの17項目は何なのかという資料を、ここを出していただけるとさらにいろい  
ろな発言をすることができると思いますし、このSDGsをつなげるということは、すごく重要  
だと思います。

それと、もっと大切なのは、今回、この持続可能なレポート（レガシー・レポーティング・フレームワーク）をIOCが初めて日本で、今度、2020年で発表することになっていきます。それをやはり大切にしなければいけないのは、これから行うオリンピック全てが、日本が発表したものに沿って、これからつくっていかねばならないので、本当に大事な、基本的なところをきちっとやっていくということが、今回のオリンピックにとって一番重要なのは、10年も20年後には、これは日本でつくったフレームワークになるんですよということになるので、あまり簡単な形でつくってほしくないなど。やはり、世界の見本になるようなものになってほしいと思います。

発展途上国に行ってもできるような形にするには、例えば木を1本たりとも切ってはいけないという話になってしまうと、結局、本当に困っている国々だって切らなければいけないような国もあるわけで、だけど上手な切り方とか、またはどのようにすれば自分たちも持続可能なオリンピックをこれから開催できるかということをしっかり模範して、先に仕上げなければいけないような気がします。

○小宮山委員長 ありがとうございます。

それでは鎌田さん、お願いします。

○鎌田委員 ありがとうございます。SDGsの関係で、先ほどおっしゃられたように、やはり、オリンピック・パラリンピックの場が認知度を高めていくという機会になるというのは、とてもいいことだというように思っています。しかしながらその一方で、まだまだ認知度がそれほど強くないようにも思います。

企業の中では、この17項目のうち全部が到底できませんので、うちの企業はどのような項目について、どのような施策を打っていくのかと真剣に考えている企業もだんだん出てきていますけれども、やはりそういった一つ一つの具体策がどういった未来につながっていくのかという施策づくりに大きな意味を感じます。

例えば、食品ロス632万トン年間出ていますけれども、ここの年月日規制が来年の6月に年月規制になるというような議論がもう既にされています。先ほど、たしか小西委員がおっしゃられたように、この議会よりも違う、その専門の部会のほうでどんどん進んでいるところと、ここでの議論というのをどうリンクさせていけるのか。そしてまた、例えば自然エネルギーの分野に関しても、原発というところから、まだまだ輸出規制がかかっている東京都はそういう場所です。

ですので、今回のオリンピックは、その安全性や、自然エネルギーということに対して

もどう打ち出していくのか。この自然エネルギーが日本で進まないという中には、やはり誰かがやるということではなく、海外のほうですと、自分たちがその自然エネルギーに参加して、だから自然エネルギーが進むというような動きにもなっていますので。先ほどの小学校のキャラクターもそうですが、どう巻き込んでいくのか、もしその一部分でもできることができたなら、すごく大きな一歩じゃないかなというように思います。

○小宮山委員長 ありがとうございます。

それでは、北原さん、お願いします。

○北原委員 要点だけ、2点だけです。委員会の趣旨とずれるかもしれませんが、一つは、持続可能性、SDGsという前提で考えたときに、このオリンピックの最大の課題は、やはり暑さだと思います。観衆の、それから選手、まずもって選手団、それから見ている人たちの暑さ対策ということ、やはり何か考えなければいけないのではないかと思います。この委員会ではないのかもしれませんが、これ大問題だろうと。競技日程が変えられない限りにおいては、そこを真剣に考えなければいけないと思います。

それから、前も申し上げましたが、もう一つは、やはりオリンピックの精神のSDGsのNo.16の平和です、世界平和の希求。これをメッセージとして2020年の東京オリンピックから発すべきだと思います。それを2年前から国民運動的に動くということが必要ではないかと思っております。

○小宮山委員長 ありがとうございます。

それでは、関さん、お願いします。

○関委員 ありがとうございます。SDGsの一般市民の方の認知度ですが、御参考までに、損保ジャパン日本興亜で先月アンケートをとったところ、御存知の方が2割5分ぐらいでした。

企業の間では、今、お話が出たように、かなり認知が進んでいるのですが、一般市民の認知度はまだかなり低いのが現状です。オリンピックと絡めてぜひSDGsの認知度を上げ、アクションにもつなげていく機会にしたらいというように思います。

その中で、先ほども出ていましたけれど、SDGsの一番の根本理念というと、もちろん環境のサステナビリティも非常に重要なんですけど、「誰も取り残さない」というキーワードで示しているのは、いわゆる人権の尊重です。それから、別のキーワードで言ったら「インクルージョン」つまり包摂が非常に重要な理念になっているので、今後、検討していく上では、特にこうした人権の尊重を常に念頭に置いて、SDGsとの絡みを考えていくべ

きではないかと思えます。

○小宮山委員長 ありがとうございます。

それでは、家田さん、お願いします。

○家田委員 SDGsに関係してですが、今おっしゃられているような調達の意味での、事前調達のところで当然やらなければいけないことはたくさんあるのですが、もう一つ、着目しなければいけないのが、期間中のマネジメントに関するSDGsの中で、特にエネルギー消費が非常にきいてくると思えます。

そこで申し上げたいのは、交通なんですけども、非常に暑い時期の、しかも都心と湾岸部に集中してやるのですよね。交通でエネルギーを消費するのは、もちろん単体の自動車や何かがどれぐらい合理化できるかというのはあるんだけど、結局、交通が集中するとエネルギーを消費してしまうんです。

ですので、交通を集中させないことをやらないと、エネルギーを大変消費してしまいます。同時に、交通が集中するのを分散させないと、定時に選手たちも運べないし、いろんな障害が出てきます。

ですので、今、この組織委員会の中につくられた技術委員会で、交通マネジメントをどのようにやるかというのは非常に真剣に議論しているところですが、申し上げたいのは、結局、現在、交通を使っている総量の15%ぐらい削減しないと破綻します。

それには、都民はもちろん、それから周辺の県や何かの人も、この期間に交通の使い方について賢い使い方をしてくれる、協力をしてもらわなければいけない。

それを今、東京都を中心に交通需要マネジメントといいますけど、そういう参加型で協力してくれるような活動を始めつつあります。今年はトライアル、来年また別のイベントがありますのでトライアルで、2020年に本番ということでございますので、ぜひそのところを御認識いただきたいし、それこそがものすごい量の違いになって出てきますので、真ん中に置いていただいとと思います。

○小宮山委員長 ありがとうございます。

私も一つだけ申し上げたいのですが、SDGsはその歴史からして、やはり先進国の課題に対しては少し弱いところがあり、私が明確に意識しているのは、エイジングという言葉が入っていないことです。

やはり社会のエイジング、エイジング・ソサエティというのは、非常に重要であり、今

どうしているかという、日本のいろいろなところで、ヘルス等と読み込んでいます。

しかし、私はやはり18番目にエイジングを提案すべきだと思います。

ほかにもある可能性はありますが、日本は、やはり課題先進国ですから、MDGsから発展してきて、みんなで議論して非常にいいものにSDGsはなっていますが、まだやはり欠けているところがあるというのをここから打ち出すのは、恐らく国連もウェルカムだと思います。

SDGsができているから、それにいかに合わせられるかというだけではなく、ぜひ、お考えいただきたい。

それともう1つは、SDGsをこのオリンピックとの関係でどう考えるのかという基本的なことです。

○中村企画財務局長 ありがとうございます。枝廣委員の御質問で、PRする場なのか、大会そのものをSDGsと、どう関連づけるのか。プレゼンテーションの順番が時間の関係で逆にすべきだったとっておりますけれども、この委員会でも御審議いただいた持続可能性に配慮した運営計画、これ自体はSDGsとどう大会運営を反映させるかという観点から、かなり網羅的に計画をつくっております。

それはそれでさらに御議論いただいて、そういうものにしたいと思っておりますけれども、一方で、この計画だけですと、SDGsと大会がどう結びついているのか、いま一つ皆さんにわかっていただけないこともあるので、委員長がおっしゃったように18番目もあるかもしれませんが、17の目標と大会がどのように結びつけているのかというのを、この計画等も含め、皆様にわかりやすく言えば、我々が大会がどのようにSDGsに沿った運営を目指しているのかということと、加えて、この取組自体がよりPRできるのではないかと、そういう両方の思いでやっております。

○小宮山委員長 ありがとうございます。御議論があるかと思っておりますけれども、ここまでにして、また時間があれば、最後に大変重要なポイントですので、議論したいと思えます。

以上の議論をもとに、事務局でも検討していただいて、この後、ディスカッショングループなどで議論していただきたいと思えます。

では、最後の議題、持続可能性に配慮した運営計画第二版について、事務局から御報告をいただいて、皆様に議論をいただきたいと思えます。



○荒田持続可能性部長 ありがとうございます。

先ほど多く御意見いただきました木材のことですけれども、持続可能性に配慮した調達コードが、国内にない中、昨年、手探りの状況で調達ワーキンググループで議論いただいた中でつくってきたところでございます。

今般いろいろ御意見をいただいておりますので、次の調達ワーキングで御報告し、また御議論いただきたいというふうに考えております。

それでは、持続可能性に配慮した運営計画の第二版でございます。

第一版につきましては、既に昨年1月に発表させていただいたところですが、第二版は目標を明確にして、数値との目標も盛り込んでいくということで、作成中でございます。概ねまとまってきましたので、進捗を御報告いたします。

第二版の構成、まず序章として、1964年大会の都市東京の変遷と2020年大会の位置づけを記載。これは第一版になかったものです。

次に、基本的な考え方といたしまして、理念、関係組織の役割分担、それから、先ほど話題にのぼりました、本計画がSDGsへ貢献するものであること、また、SDGsとの関わりについても基本的な考えのところで述べています。

次に、主要テーマごとの施策概要ということで、五つテーマを挙げております。最初の三つがいわゆる環境関係で、一つ目が気候変動、二つ目が資源管理、三つ目が大気・水・緑・生物多様性等、残りのうち、4番目は人権・労働、公正な事業慣行等への配慮、5番目が参加・協働、情報発信になっております。それぞれワーキンググループ、ディスカッショングループ等で御議論いただいておりますので、後ほど各委員の方に御報告をお願いしたいと思っております。

四つ目の丸が、実施主体別の行動計画・進捗状況というところで、そこまでに掲げられてきた計画、取組等について、誰が、何をやるのかというのをここで明確に書いていくということでございます。

最後の丸が、本計画を実施するためのマネジメント及びツールということで、立てた計画について、きちんとPDCAを回していくと。何ができて、何ができなかったのか、きちんとそれを分析して、次の大会中に反映させれば反映しますし、今、反映できなければ、次のパリ大会、ロサンゼルス等につなげていくということです。

次のシートは、計画の構成ですが、時間の都合もありますので、割愛させていただきます。

その次から、先ほど申し上げた第2章の五つの柱につきまして、委員の皆様にはワーキンググループ等で御議論いただいておりますので、その内容について御報告いただきたいと思います。

それではまず、気候変動につきまして、脱炭素ワーキンググループの小西委員、よろしくお願いたします。

#### ○小西委員

ポイントが五つあります。脱炭素ワーキングでは、今回、一番のここまでの成果は、見える化をできました。カーボンフットプリントの把握をしまして、結論から言うと、ロンドンよりも東京のほうがより既存の会場を使えるということで、最初から少ない、そして会場見直しをしたことによって、より下がっているといったカーボンフットプリントが出ています。これはもちろん暫定的なものですので、今後、さらに精査していきながら、アップデートしていく予定になっております。

それから、まずは回避策ということで、省エネルギーについて、どういった方策で、どういったものがやることができるかということを検討しております。続いて、100%再エネで賄っていくためにはということは今から、またさらに議論することになっております。

そして、オフセットですけれども、気候変動の今回の大目標をTowards Zero Carbonという形で、ほぼ、固まっております。なぜZero CarbonじゃなくてTowardsかというのと、やはりオフセットを厳格に、国際的に持続可能性を担保したオフセットクレジットガイドラインに従ったクレジットでオフセットすることを優先して、何でもいいから、とにかくゼロにするというのではなく、きちっとガイドラインというものをレガシーとして残せばなという考え方でTowardsという形、パリ協定に向けて、脱炭素社会の礎をつくるという形で、この名前にしております。ということで、今、オフセットの考え方の整理もしている最中です。

それから、これが今お話ししたものの具体的な内容です。省エネ機器がどのようなものを検討しているか、再エネに、例えば会場に再エネをつける、そして再生可能エネルギーをどのように購入していくか、電力の利用方法とか、またオフセットの話とか、こういった形で、具体的な内容、今お話ししましたことをより具体的に書いてあるのがこちらでございます。

#### ○荒田持続可能性部長 ありがとうございます。

それでは、次に資源管理につきまして、資源管理ワーキンググループ座長の崎田委員、

よろしく申し上げます。

○崎田委員 それでは、資源管理についてお話をさせていただきます。

これに関しても、今、地球環境問題の大きな分野ということで、資源をできるだけ効率的に活用する、そして、その後の3Rを徹底していくということが大変重要だということで、今、ここに書いてありますように、資源管理の大目標としてZero Wastingが一番の候補になっています。Zero Wasteという考え方があります。これはWaste、ごみを減らすという話だけではなく、資源のところから、トータルにしっかり管理をしていくという全体のことを強く言う考え方ですので、Zero Wasteでいいのではないかという意見もありますが、みんなでそこに向かうということで、今、Zero Wastingという言葉が一番候補としてしっかり残っております。

これに関しては、SDGsの目標に関しては、12番の持続可能な消費及び生産形態の確保という項目が一番強くなっていると思いますが、この話し合いの中で、具体的にはインプット側、いわゆる資源の優先順位をまず考えていくということと、アウトプット側での優先順位を考えていくことを重視しています。3Rというと、資源側から考えるか、廃棄物からかという話にもなりますが、全体をしっかりと考えていくために、細かく最初から考えて、優先順位を考えました。

そして、それを現状把握というふうに書いてありますが、どのように大会に関わる資源があるかということで、まず、資源関係情報を把握するというところで、全体の絵を描いていただきましたけれども、インプット、アウトプット、そして、今、右側に書いてありますが、消耗品と備品、資材と、あと建設資材、こういう全体像に関して、詳細に絵を描いていただきまして、それをしっかりと考えていくというようなことで、今その対策をどのようにしたらいいのかという視点で、そういう具体的な目標と、その目標値の設定、そして最終的な適正処理、こういう具体像を徹底するような、詳細に関して意見交換が始まっております。

委員の皆さんにとって、今非常に関心が高いのは、こういうものを決めたときに、その後の管理・推進体制をどのようにするのかということです。やはり、組織委員会の中でしっかりと取り組む形をつくっていただくことと、ISO20121できちんとPDCAを回すという、こういう視点で考えていただくのが大変ありがたいと思っております。

今、下に書いてありますように、この大会で資源を無駄なく活用して、SDGsのゴール12を実現する上で大きな契機となるような大会の計画を策定するというところで話し合ってい

ます。

今、下の右のほうに「10の具体的目標」と書いてありますが、それに関して、次のページを見ていただければということで、今この10項目の目標を考えて、定量的な目標設定ができるものに関して、どのくらいの数字が可能かという意見交換を始めているところです。

リデュース、リユース、リサイクル。リデュースのところでは食品ロス削減と、これと2番目、容器包装等の削減、3番目が調達物品のレンタルなどを活用した新規物品の削減。リユースのほうは、レンタル・リースとか、そういうものを活用したり、使用後の再使用とか、そういうことを徹底した調達をしていくというようなことと、その後、出たものに関しては、再生利用も徹底するという、この辺の流れをしっかりとって、目標値なども考えていくというような段階にあります。

4番目は再生材の利用、これは本当にさまざまな資源がありますけれども、まず、資源を効率よく活用するところが大変重要なわけで、その一つの具体例として、5番、入賞メダルの再生金属利用という、先ほどからでている都市鉱山メダルプロジェクトがありますけれども、やはりこういう100%の再生資源を活用して、メダルをつくるという挑戦が、これがうまく実現できれば、世界初の取組になるのではないかとということで、いろんな方の御協力で今、広げているところです。

6番目は運営時廃棄物の再使用・再生利用。7番が食品廃棄物の再生利用。8番、建設廃棄物の再使用・再生利用。9番目が再生可能資源の持続可能な利用。そして、10番が環境中への排出の削減という、ここのCO<sub>2</sub>の削減のところまで、全体をちゃんと、目標値をしっかりと見ていくことと、あと残っているのが、観客とか選手の方、みんなにとって非常に関係してくることで、実際の生活の中で、どのように資源を分別し回収するかとか、やはりどのように資源化するかということ。現実のところは、非常に観客や社会の皆さんからわかりやすいところですので、これからもう少しきちんと話し合わなければいけないというところも残っているかなというふうに思っております。よろしく願いいたします。

○荒田持続可能性部長 ありがとうございます。

それでは、大気・水・緑・生物多様性等について、同じく持続可能性ディスカッショングループ座長の崎田委員、よろしく願いいたします。

○崎田委員 ありがとうございます。これに関しては、今、持続可能性ディスカッショングループの中で定期的に話し合いをさせていただいておりますので、私から、少しコメントをさせていただきます。

やはりこれは大気・水、もともとの環境条項を大事にすること、そして緑を増やし、生物多様性まで、全体的な網羅をしておりますが、こういう自然環境を大切にしている部分は、メガイベントにとっても大変重要なことだということで、意見交換をしてまいりました。

特に一番最初のところですが、やはり日本は、もともと里山などでの人の手を入れた自然との付き合いとか、臨海部での海の恵みを活用する、そういうような関係、人と自然の関係の中で生きてきたと。そういうことも踏まえた上で、今回、東京という都市独自の自然環境との関わりをしっかりと考えていくということが大事ではないかと話し合っています。

特に今までのヘリテッジゾーンと言われている都市部のところでも、緑が今大変増えてきている、そしてベイゾーンのところも今自然回復など、東京都の港湾や海上公園整備などのいろんな戦略でやっておられたりしています。こういう全体の中で、新しい、しっかりとした都市像を、一番下の大目標として「自然共生都市の実現」とありますが、こういうようなテーマを掲げて、しっかりと街をつくっていくということを考えようと意見交換しております。「大会後のレガシーも見据えて、大会の開催を通じて豊かな生態系ネットワークの回復・形成を図り、かつ快適さとレジリエンスを向上させる新たな都市のシステムの創出に寄与する。」という、こういうような内容を今、進めております。

具体的に、次のページを見ていただければと思いますが、個別目標として、1、2、3と意見交換しております。1番は水循環、いわゆる環境負荷の最小化と水循環の機能を高めること。目標2番が、多様な生物への配慮、そして豊かな緑地と水辺環境の創出、魅力ある景観の形成、豊かな生態系ネットワークを有する都市環境の創出。目標3は、大会の調達でのやはり配慮ということをしかりと目標にして取り組んでいこうということになっております。

具体的には、下のほうを見ていただければと思いますが、やはり一番関心が高いのは、先ほども御意見が出ていました暑さ対策ということで、熱中症対策などにつながるようしっかり取り組んでいくこと。そして、水循環への配慮ということで、雨水利用とか東京湾の水質改善も大事だという話も出ております。

次の目標2に関連する生態系ネットワークのところでは、やはり、都市の緑と自然環境の再生ということで、会場などでの緑化の推進とか、エコロジカルネットワークの形成、そして、組織委員会だけではなく、いろんな企業の取組なども進んでおりますので、そう

いうことも踏まえて連携していく。大会後を見据えた緑と水辺空間の整備。そして、最後には、やはり先ほどの選手村のビレッジプラザでの木材リレーの取組もあります。しっかりとそういう調達における配慮をしながら取り組むなど、こういう全体像を踏まえてぜひ取り組んでいただきたいという内容になっております。よろしくお願いいたします。

○荒田持続可能性部長 ありがとうございます。

それでは、人権・労働、公正な事業慣行等への配慮について、人権労働・参加協働ワーキンググループの黒田座長、よろしくお願いいたします。

○黒田人権労働・参加協働WG座長 黒田でございます。初めて本委員会に参加させていただきました。よろしくお願いいたします。

持続可能性の人に関わる部分をしっかりやっというということで、このワーキンググループというものが設置されたわけですが、これはまさに先ほど御議論がありましたSDGsの理念とも軌を一にするものだと思っております。

また、国連が2011年にビジネスと人権に関する指導原則というものを採択しましたが、これは2024年のパリ大会以降、開催都市契約に盛り込まれるということになっております。東京大会は、その対象ではありませんが、それに先駆けて、この原則の理念にのっとり、全ての人の人権を尊重するという、また、労働者の権利を尊重するというを行いますと運営計画に書き込んであります。これはメガスポーツイベントにおいて画期的な取組であり、また、国際社会の最先端の動きにも合致するものだと思っております。

そして、この人権労働等の大目標ですが、「多様性の祝祭～誰もが主役の開かれた大会～」というふうに掲げております。

ここにもございますように、施策全体の方向性としましては、人権を取り巻く問題は、メガスポーツイベントにおいても複雑かつ多岐にわたり影響を及ぼしている、そのサプライチェーン、バリューチェーンにおいて、こういったことに取組をしていかなければいけないということですね。

あと、オリンピック・パラリンピック競技大会が、世界最大規模のスポーツイベントであるからこそ、多様な人々が出会う、共に多様性を認め合う、そういう開かれた大会にする、そういった必要があるということです。

このため、特にダイバーシティ&インクルージョン（多様性と包摂性）、これも先ほどから何度か出てきているキーワードでございますが、この確保であったり、先ほど申し上げました「ビジネスと人権に関する指導原則」にのっとり、差別等がない、また、強制

労働であるとか児童労働、そういったものにも、間接的にも助長しないような、そういった大会、また、負の影響があった場合には、それを軽減するような、そういったことに努める大会を目指す。そして、腐敗行為や反競争的な取引等に関与しない公正な事業慣行が確保された、そういった大会を目指すというようになっております。

次のページですけれども、ここに細かく書いてございますけれども、大きくは人権労働等を尊重した取組としまして、大会に関わる全ての人々に対する人権を尊重した取組の実践。この中には、特に研修であったり教育というものも重要になってくるだろうと思えますし、また、アクセシビリティの確保等々、こういったものが目標として挙げられております。また、労働への適正な配慮の実践ということで、ここに書いてございますような、多様な人材の確保であったり、ここも研修というものが重要になってくると思えます。そして、公正な事業慣行等の配慮方策の実践、また調達コードの話、先ほどから何度も出ておりますけれども、調達時における配慮方策の実践ということになっております。

また、実際に問題が発生してしまったときの対処ということで、この目標11から14というものが掲げられております。

以上です。

○荒田持続可能性部長 ありがとうございます。

最後に、参加・協働、情報発信について、同じく人権労働・参加協働ワーキンググループの黒田座長、よろしくお願いします。

○黒田人権労働・参加協働WG座長 引き続き、参加・協働、情報発信（エンゲージメント）ということですが、こちらの大目標は、「パートナーシップによる大会づくり～誰もが主役の開かれた大会～」というようになっております。

こちらに関しましては、もう既にオールジャパンでの参画状況ということが、先ほども御紹介ありまして、約4万件のアクション、3,550万人のアクション人数、あるいはマスコットの投票に8割の小学校が参加されたということが、もう既に話の中にございました。

この参加・協働というのは非常に重要だということで、持続可能性に配慮した大会の実現には、広く社会やボランティア、観客など、市民の参加・協力が不可欠であるということです。また、SDGsの中でも、ゴール17というのが「パートナーシップ」というものを掲げております。社会全体で多様な主体が参画していくような、ここも多様性と包摂性（ダイバーシティとインクルージョン）が確保された、そういった社会の構築が求められています。このため、誰もが主役の開かれた大会、ここに多くの方に参加協働していただく、そ

ういったことで大会をつくり上げていくということをこの中で書いてございます。

次のページへ行きまして、参加協働分野の目標としましては、様々な主体との協働・連携、また、人材育成を通じた幅広い参加の創出、そして国民参加型プロジェクト等の実施を通じた幅広い参加の創出、4番目に持続可能性配慮に対する理解と行動促進に向けた情報発信の推進ということで、ほぼ四つというようになっております。

以上でございます。

○荒田持続可能性部長 ありがとうございます。

次に、最後のスライドですけれども、今後の策定の予定でございます。本日、委員会で御報告いたしまして、4月の下旬から第2回のパブコメ、既に年末に第1回パブコメを実施しておりますが、もう一度行いたいと思います。そして、6月の末に向けて策定を進めていきたいと思っています。

以上で御報告を終わります。ありがとうございます。

○小宮山委員長 ありがとうございます。

これが我々のレポートとして今年の非常に重要なアウトプットになるわけですので、御議論をいただきたいと思います。それでは、吉田さん、お願いします。

○吉田委員 それでは、大気・水・緑・生物多様性の部分は崎田委員から御説明いただいたんですけど、少し補足させていただきます。

目標2のところは生物多様性の配慮ということで、具体的にそこの中には外来生物対策のことは入っていないんですけど、本文には入っております。3月半ばに生態学会が北海道で開かれ、その中にいろんな報告がされましたが、昨年からヒアリが神戸港で発見されてから、日本中で大問題になっていきますけれども、実際上、これをとめるということが非常に難しい。東京港でも、もちろん入ってくるわけです。

これは中国の南部から来たコンテナの中に入っているんですが、荷物が金属の上に乗っているのではなくて、木材性のすのこの上のようなものに乗っているわけです。そこが古いコンテナを使っていると、その中にアリが巣をつくっているわけです。その時点であけてチェックすればいいじゃないかと思うかもしれませんが、荷主でないとあけることはできないと。法律はありますけれど、チェックすることはできない状況で、非意図的な導入というものに追いついていないのです。だから、法律を変えればいいのではないかということなんですが、多分、法律を変えるのは結構時間がかかります。

ですから、ぜひ、オリンピックに関しては、オリンピックのために輸入するようなもの



に関しては、そういったところでチェックするというような前例をつくる。台湾なんかでは、ヒアリをにおいで発見するような犬の導入とかがあるようですから、そういうような前例をつくって、オリンピックでやれたんだから、ほかでもできるだろうというように持っていけないとできないのではないかなと思ひまして、ぜひ、日本の今の法律レベルよりも、もっと進んだことをやらなければいけないのではないかなということですね。

それから、目標3に関しては、調達のことが書いてあります。調達については全体にも書かれていますが、先ほどから、皆さんから御意見が出ていますとおり、木材の調達については、いろいろ問題があつて、御指摘があるところです。現在は、調達コードをつくるという段階から、それを運用して、調達コードに合わなかった場合はどうするのかということをチェックしたり、関連分野でもっと進んだ調達コードができた場合には、どうやって調達コードを見直していくのかという段階になっていると思ひます。ぜひ、最後のほうのマネジメントというツールというようなところに、調達コードの運用および実施のモニタリングと、それに基ついた見直しということを入れていただきたいと思ひます。

○小宮山委員長 ありがとうございます。

それでは、横張さん、お願いします。

○横張委員 同じく大気・水・緑・生物多様性のところですけども、一口に申しまして、やはり暑さ対策ということに対する言及が、やや少ないというか、あまり明確ではないのではないかなというのが私の感想です。目標1、目標2の両方に多分関わると思ひますけども、そこにもう少し暑さ対策という話を入れるべきではないかなと思ひます。

それから、具体的な取組例として、ヒートアイランド対策というふうにありますけれども、これもいま一つ何をしようとしているのかよくわからず、むしろ都市熱環境に対する緩和策と適応策といったような形でもって、どのような暑さ対策をしようとしているのかということを確認に記すべきなのではないかなというように思ひます。

先ほども御指摘がございましたけれども、私どもも、過去、ロサンゼルス大会以来のオリンピックのその開催月の気温をずっと比較してきましたけれども、気温及び湿度ともに東京が最悪でございまして、言ってみれば、これだけ暑くて、しかも蒸し暑いところでオリンピックをするということは、過去の例がありません。

ですから、それに対して私たちがどういう対策をきちんとできるかということは、まさにレガシーとして、今後の特に低緯度地帯で、途上国でオリンピックが開催されるようになっていくとすれば、大変貴重な経験になるのではないかと。そして、それは、先ほども

ございましたけれど、SDGsという点にあっても非常に重要なポイントになるんじゃないかと。

そういうことも含めて考えてまいりますと、ここをもう少し暑さ対策ということを前面に押し出したような形でもって記載することが必要なのではないかというふうに思います。

以上です。

○小宮山委員長 ありがとうございます。

それでは、石戸さん、お願いします。

○石戸委員 議論に参加した参加協働情報発信について少しコメントをさせていただければと思います。

非常にいろいろなアクションが行われていて素晴らしいと思いました。小学生が道の真ん中で「僕が投票したやつが選ばれた」と誇らしげに言っている姿をみて、良い取組だとしみじみと感じました。

3点質問とコメントをさせてください。一つは、3,350万人も参加しているなどはとても貴重な情報だと思いますが、どこかに記載されているのでしょうか。このような情報を可視化して行くのが良いと思います。例えば目標値と、現時点での到達度何%といったものが表示されていると、自分も参加してみようかと一歩踏み出す人も出てくるのではないかなと思います。アクションを求めているのであれば、数値の可視化と併せて簡単な参加の仕方を提示して誘導していくのも良いのではないかと思います。

2点目が、たくさんの具体事例が既にありますが、その情報の提示の仕方として、ほかの人、ほかの地域が展開しようと思ったときのやり方を示せると良いのではないかと思います。他地域展開を意識したコメントがあるだけでも、ほかの地域も真似して良いという認識が広がるのではないかと思います。発展の仕掛けを意識してほしいというのが2点目です。

3点目は、SDGsを位置づけるのであれば、この五つに関しても、それがSDGsのどこに位置づけられているのかアイコンをつけて示すと良いのではないかと思います。全部の資料にSDGsを意識して入れ込むことが広がりへの第一歩ではないかと思います。

以上です。

○小宮山委員長 ありがとうございます。

それでは、中林さん、お願いします。

○中林委員 三点、お話しします。

資源のところ、食品ロスという話がありますがけれども、先ほどの低カーボンあるいはSDGsのことを含めると、容器包装の削減というところに、いかに日本の文化として自然材を使うかと。昔は竹の皮であったり、経木であったり、折箱は、もう木の折であったり、そういうものが食器材だったわけです。お箸も自然のもので。そういう意味では、現在はスプーン、フォーク、その他を含めて、ファストフード的なものというのは全部プラスチック系になっていて、1回使っておしまいです。ですから、いかにこれを木にするか、有機材にするかというのが、私は大事かなというのが1点です。

それから、水・緑のところ、今日の説明ですと、里山というのが出てきたんですが、概念的には、あと里海と里川ではないかなと思います。海も川も山も、人が手入れをして、人がうまく使って、環境にも防災にも役立ち、気持ちよく使える、そんな山と海と川をこの際つくっていくというようなことが大事かなと思います。

それから、参加と協働、あるいは労働、どちらになるのかわからないのですが、労働のほうで問題発生時の対応という項目がありますが、私は、もともと防災ということでここに関わっているんですけども、8万人とか、たくさんのボランティアさんを含めて、大会運営に関わるスタッフ全てが、例えば地震が起きたり台風が来たりという災害時に、どういう対応をするのかという統一した基準を持ち、行動ができるようにしておかないといけないのではないかなと思います。

そういう意味で、「問題発生」の中身が何か人権問題、その他の危機管理になっていますが、災害や事故に対する危機管理というのも考えておいていただく必要があるのではないかなということです。

○小宮山委員長 ありがとうございます。

それでは、松島さん、お願いします。

○松島委員 このページですけれども、最後に「腐敗行為や反競争的な取引」、「公正な事業」、最近のやはり日本の製造業、いろいろ不祥事とかリニアの談合なんかを見ますと、これに関して、目指すんじゃなくて、オーディットな仕組みを入れておかないと実効性がないと思います。

特に気にしているのは、オリンピックに近くなってスキャンダルが出ると大変なので、今の段階でも、もう一度オーディットをかけておくと。オーディットをかけるということによって抑止力になるので。これは、日本人って、最近、やはり相当、倫理が緩んでいま

すから、ここはきちっとオーデイトをかければと思いますね。

○小宮山委員長 ありがとうございます。

それでは、田中さん、お願いします。

○田中委員 2点です。1点目は、先ほど石田さんがおっしゃっていたこととほとんどかぶるんですけども、ここに出席している委員は、恐らくSDGsに関して反対する人はいらっしゃらないと思いますので、明確にポンチ絵みたいなものに示して、これとこれがどう関係してくるんだと。例えば、私が興味ある参加・協働、情報発信というところと言いますと、例えば3と順番に当てはまっていくとか、そういうものが明確にポンチ絵で凝縮されていくと、やっぱり発信力もあるのではないかなというのが1点目です。それは、もちろん数値の可視化も同じです。

それと、2点目なんですけど、ビジネスと人権に関する指導原則のところちょっと関連してくるのですが、私は今、精神障がいの方等にすごく仕事をさせていただいて思うことは、やはり、働く組織委員会の人間も含めて、ハラスメントの問題や、時間外労働の問題であったりということも、きちんと私たちは対応しますよということを明確にここで打ち出しておいたほうがいいのではないかなと思います。

精神的なものに関するものに対する、メンタルヘルスというものは、本当にSDGsのもの、本当に持続可能性において、私たち自身が健康でないと持続もできないということを明確に打ち出したほうがいいのではないかと考えています。

○小宮山委員長 ありがとうございます。

それでは、北原さん、お願いします。

○北原委員 突拍子もないと言われるかもしれませんが、開会式は、国別の入場行進はもうやめて、競技種目別に変えるべきと。それこそ先ほどの人権の話ではないですが、国や民族や宗教を超えた真の世界平和、それから多様性を認めると、そういったSDGsの思想にも合致しますし、クーベルタン男爵の思想にも合致するはずです。それを東京2020大会からやるべきと、これを提案すべきと思います。

○小宮山委員長 ありがとうございます。

それでは、森口さん、お願いします。

○森口委員 非常に私もおもしろいと思います。その一方で、日本という国が世界の中でどういうポジションにあるのかということ、再認識する非常に重要な機会だと思います。先ほど吉田委員からも少し輸入の話がありましたが、やはり日本は資源の輸入依存度が非

常に高いというのが一つの特徴だと思いますので、これは持続可能性を考える上で非常に重要な点だと思います。SDGsは、先進国、発展途上国という言い方自身も、恐らくもう適切ではないと思いますけども、そういうことの中で、日本のオリンピックに伴う活動が、どういう側面で持続可能性と関わっているかということ認識する非常に重要な機会かと思っています。

資源管理のところ、再生可能資源の持続可能な利用という話がありました。これは中林委員から御指摘のあった、自然由来の材料を使っていくということにも関わってくると思います。

資源管理、ともすれば下流側といいますか、廃棄側の話がどうも中心になりがちなので、Zero Wastingという言葉も、私自身も提唱したんですけど、やっぱりそれだけではなかなか資源側の問題が捉えにくいのではないかとということもございます。先ほど出ておりました人権問題等も、資源採掘産業、資源産出産業なんかにも関わってまいりますので、何度も出てまいります調達コードの話等を、ぜひ、このところは今日、何度も出ておりますので、事務局側といいますか、組織委員会側で、今後の見直し等について少し明確な方針を示していただいて、記録にとどめていただくとありがたいと思います。

○小宮山委員長 ありがとうございます。

それでは、小西さん、お願いします。

○小西委員 今、森口委員がおっしゃったことと同じなんですけれども、ワーキンググループ、気候変動から五つ今報告がありました、これほど皆さんが言及している調達ワーキングの報告が、この親委員会でないということ自体が結構残念かなと思っております。運営計画の、あくまでもどうやってこれを担保するかのツールという位置づけが調達コードであることはよくわかるんですけれども、この運営計画を出すときに、やはりきちっと担保するための調達コードそのものも、一緒に、つけて出していきたいと思っております。そのことについて、どういう形になるのか教えていただければと思います。

○小宮山委員長 その件は、後程、お話いただきます。

それでは、マリさん、お願いします。

○マリ・クリスティーヌ委員 先ほども申し上げているように、このレガシー・レポート・フレームワークというのは非常に重要なことであるということを私はもっと認識していただきたいと思っておりますのは、やっぱり Kyoto Protocolを出したのと同じように、2020年のオリンピックは、これから世界中のオリンピックを開催するときのフレームワー

クになるからこそ非常に重要なレポートであって、このレポートを出す、オリンピックが始まる前に、二つももう出さなければいけないことになっています。その二つも出さなければいけないものは、どうつくられているかということが全然わかっていないのと。

あともう一つは、見ている、これを英語に置きかえたときに、どこまで英語で明確になるかということがわからないので、むしろワーキンググループとか、こうやってつくっていく上においても、英語と連動してつくっていかないと、日本語って非常に重複することが多く、翻訳したときにポイントがずれることがあると思います。

ですので、ぜひ、英文も含めて出していただきながら、それが本当にロジックで国際社会の中でもきちっとわかっていたいただけるような、日本のこと、非常に日本的な考え方をどうやって国際社会が理解してくれるかということ。

特に里山という言葉自体も、里山イニシアチブという言葉が今動いてはいるんですけども、本当に里山の概念、心というのは、英語やフランス語でもいいですけども、外国の言葉になったときに、日本人の心というものがそこに伝わっているかどうかということが、一番、大きなギャップが出てくるのではないかと思うので、そこもちゃんと意識しながらつくっていただきたいと思います。

○小宮山委員長 ありがとうございます。

それでは、崎田さん、お願いします。

○崎田委員 最後の参加・協働、情報発信のところで一言。

もう既にいろいろ書いてありますけれども、ボランティア、大会のボランティア、8万人規模のボランティアの方を今、養成するという話がありますけれども、ぜひ、その中の基本的な研修項目に持続可能性をしっかりと入れていただいているんですが、そこをきちんと伝えるというのは大切です。全体をあまりにも詳細に伝え過ぎると、ボランティアの皆さん、わからなくなってしまう可能性もありますので、できるだけポイントを押さえて、8万人の方にしっかりと研修をしていただきたい。そういうところに、やはりSDGsをうまく活用していただくことが、非常にわかりやすいのではないかなという感じがしますので、しっかりと持続可能性の研修プログラムをつくっていただきたいし、それにアイデア出しとか、みんなで貢献できればうれしいなというように思います。

なお、そのボランティアだけではなく、目標2のところに、環境学習の実践による参加創出というようにあります。今、中高生に、3Rなどの体験やワークショップに取り組んでもらい、こういうことに自分たちも参加をし伝えていこうというような、そういう意欲を

醸成する学習づくりも広がっていますので、ぜひ、またオリンピック・パラリンピックのときの3Rをどのように外国の方に伝えるかとか、そういうことにもいろいろチャンスをいただければありがたいというように思います。よろしくお願いします。

○小宮山委員長 ありがとうございます。皆さんから大変いい意見をいただいておりますので、ぜひ、事務局のほうでも十分考えていただきたい。

それから、私も少し、まとめも含めまして何点か申し上げたいと思います。

一つは、このレポートの目次の構造は、非常によくできてきたと感じております。それが1点ですね。

それから、二つ目の点は、キラーコンテンツを幾つかつくりたいと。それは、持続性というのは地球と人間と社会、この三つの軸から考えていこうというのが大体、大勢になってきております。それで、地球と社会、この接点のほうが前半のほうにずっと来ています。気候変動ですとか、資源管理、自然共生社会等、これまで議論してきたのは、こちらが多いんです。

それで、かなりよくまとまってきていて、キラーコンテンツも、例えば都市鉱山というのは21世紀の中核になっていくのですが、「都市鉱山×スポーツ」ということで、メダルプロジェクトというのは非常にいいキラーコンテンツです。だから、こういうキラーコンテンツを幾つかこの中にちりばめることができれば、非常にアピールするようになります。ここら辺、ぜひ努力をしていきましょう。

それから、もう一つは人間ですよ。やはり、今日、皆さんがおっしゃっていた辺りは、「人間×社会」、こっちが弱いんです。目次はできていますが、この中には、いわゆるコンテンツがないので、ここが、これからの議論の本当に大事なところだろうと思います。

例えば日本で今、進めていることであれば、ここは働き方改革です。今、人生100年時代の生き方とか働き方という考え方は非常に重要に議論されているわけですので、そのようなものをオリンピックの中に取り入れることは非常にできやすいと思いますよ。

それから、都市と過疎地の問題です。これも非常に大きな「人間×社会」の重要なポイントで、いかにして都市に集中してしまう人的な資源を地域に、3,300万の人たちの中に、人をどうやって循環させるか。これも今、逆参勤交代という、非常にこれからあり得べきような考え方が出てきている。だから、そういうのをぜひこの中に組み入れていけば、すばらしいものになるのではないかと。

それからもう一つ、そうした意味も含めて、東京2020参画プログラムです。今日も幾つ

か非常に魅力あるものを御報告いただきましたけれども、この中に今言った例を掛け算していくことができると、いいものになるのではないかと思います。

最後に、枝廣委員が御質問をされたけれども、SDGsとオリンピックをどのような関係にしたらいいと思うかコメントをいただけますでしょうか。

○枝廣委員 確かに運営計画のところでベースになっているのはわかるのですが、SDGsをしっかりとやっていくオリンピックという位置づけをこれまでは外には出していなかったと思いますので、ロゴのラベルを貼ることが全てではないのですが、SDGsの17ゴールに照らし合わせて、東京五輪って今どうなのか、どこがしっかりしていて、どこが弱いのか、そこを強めていくにはどうしたらいいか。

いいものをつくる枠組みとしてSDGsがあると思います。そこのところは、まだ時間が許すタイミングだと思うので、一度、そういった観点からしっかり見直しをして、史上初のSDGs五輪ですと言えるような形になるといいなと思っております。

○小宮山委員長 ありがとうございます。

いずれにしても、東京オリ・パラを招くときにサステナビリティとエンゲージメントについてコミットしたかと思しますので、そういう意味で、SDGsとの間に矛盾はないと思います。

そのときに、今日も調達のことが非常に出ていましたが、SDGsというのは、もともとはやはり途上国から出てきているもので、文明が発達してきたときに、取り残されているところをちゃんと引き上げましょうという観点が強いんです。だから、そこはどこに出てくるかという、一番出てくるのは調達です。日本自体には、少年労働というのは少ないし、きれいな水にアクセスできないという人も、ほとんどおられないわけです。やはり、課題先進国としての日本からSDGsをどう考えるのかをきちんとこの後ディスカッショングループ等でも議論して、論理構造を明確にしていっていただければと思います。

それでは、最後に事務局から、事務連絡等ございましたらお願いします。

○伊藤担当部長 本日は、貴重な御意見を多数いただきまして、ありがとうございました。

本日の議事の内容につきましては、事務局から皆様に確認の御連絡をさせていただいた上で、議事録を完成させまして、後日、ホームページ上で公開させていただきたいというように考えております。

○小宮山委員長 一つだけ追加させてください。

今日、皆さんから発信の問題が出ました。非常にいい議論をしているし、だけど、これ



はIOCにだけ言っても仕方ないのですが、SDGsには、ストラテジック・ディスカッション・グループというものもあります。これもSDGsで、あちこちにあります。

だから、どうやって広めていくか非常に重要ですので、ここは少しオープンに御意見をいただいて、どうやって発信していくのかということをお考えいただくと大変ありがたいです。これは皆さんの意見だったと思いますので、よろしくお願いします。

○伊藤担当部長 承知いたしました。

最後に小宮山委員長から、持続可能性運営計画第二版の策定の件でお話をお願いできますでしょうか。

○小宮山委員長 持続可能性に配慮した運営計画第二版は、今年の6月に公表させていただく予定ですが、それまでの間に街づくり・持続可能性委員会の開催予定はありませんので、最終的な内容については、持続可能性ディスカッショングループにて、報告いたします。

○伊藤担当部長 ありがとうございます。

次回のこの街づくり・持続可能性委員会の開催については、また改めて御案内させていただきます。

○小宮山委員長 ありがとうございます。

○根本国連広報センター所長 すみません。今、発信のことを触れていらっしゃったので、情報提供としてお話ししたいのですが、4月にニューヨークの国連広報局で、オリンピック、それからスポーツ・アウトリーチを担当している幹部が訪日します。その際に、組織委員会ともSDGsについての共同発信などを協力できないかということでお話をさせていただいております。ありがとうございます。

○小宮山委員長 それは大変いい機会ですので、こちらの考え方も少しまとめて、議論ができればいいのではないかと思います。どうもありがとうございました。

それでは、今日の委員会、これで終わりたいと思います。どうもありがとうございました。